

ロハス・マガジン、ソトコトの小さな別冊

チビコト

S O T O K O T O

特集

ゆたかな生物多様性と共に暮らす生き方
ニッポンは里山の国



ゆたかな生物多様性と共に暮らす生き方
ニッポンは里山の国

制作協力 環境省 自然環境局 生物多様性地球戦略企画室
企画制作 月刊ソトコト編集部
アートディレクター 太田雅貴(太田デザイン事務所)
デザイン 井上宏樹(太田デザイン事務所)
ペーパークラフト 長尾昌枝
写真 上野 敦 阿部雄介 森田敏隆 アマナイメーجز
取材・文 久島玲子 小泉庸子 榎本ゆう子

から、育てんよ!



ニッポンは里山の国

海

があり、森が生い茂り、河が流れ、大地が広がる、さまざまな地形や気候風土に彩られた、まあるい惑星・地球。そこには、約40億年という気の遠くなるような時間をかけて、約3000万種とも言われる、実に多種多様な生き物たちが暮らしています。

そんな「いきものにぎわい」が、「生物多様性」です。私たち人間もまた、その一員として暮らしています。多様な生き物たちの生命のつながり、その豊かな自然の恵みを受け、私たちは生きています。

そんな生物の多様性が、今、急速に失われようとしています。開発による自然環境の喪失、地球温暖化の影響、生活習慣の変化など。その要因は複雑に絡み合い、ひとつの原因を特定することはできません。

し

かし、ひとつ確実に言えることは、自然とは、私たちの生活の基盤であり、自然とのつながりなくして、私たちは生きていくことはできないということです。

自然と人の暮らしの良好なバランスを再構築すること。都市や町に生きていても、私たちは毎日ほかのいのちを食べ、どこかで自然とつながっている、そんな意識を持つことから、この問題を考えてみよう。

そのひとつのきっかけとして、『ソトコト』は、日本独特の自然観である「里山」に注目したいと思います。「里」。それは、私たちの暮らす場所。「山」。それは、私たちの暮らしを支えてくれる自然。里と山とが調和の取れた「里山」的世界観に、自然と人が協調して生きる理想的な姿がある。

生物多様性の保全のために私たちができること。里山という発想で、身近なところから考えてみませんか？



SATOYAMAという発想から、 日本という国、そして世界を 再構築してみよう。

Talks About Biodiversity

語り
環境ジャーナリスト
枝廣 淳子
Junko Edahiro

生物多様性ってなに？

「生物多様性」という言葉はちょっと難しく、何が問題なのかピンとこないなあ、という方も多いかもしれません。たとえば、森の中に入ると、さまざまな植物や動物が生きていますよね。それらの生き物はバラバラに存在しているのではなく、さまざまなつながりを持っています。木に太陽の光が届くと、葉っぱが茂ります。その葉っぱを毛虫や青虫が食べます。その毛虫や青虫を小鳥が食べます。その小鳥を、オオタカなどの猛禽類が食べます。鳥の死骸を食べる昆虫もいれば、落ち葉などを分解する微生物もあります。そうしてできた栄養分で植物が育ちます。

地球上には、数十億年とい

う進化の過程

の中で、多くの生物種が生まれてきました。お互いに「食べる・食べられる」という関係（食物連鎖と呼びます）や、虫が花粉を運ぶなどの共生関係でつながり、支え合って生きているのです。この大きなつながりの網からはずれて存在している生物はありません。すべて何らかの形でつながっており、多様な生き物がいることが豊かな自然を織りなしているのです。この生命の豊かさを表す言葉が「生物多様性」です。

多種多様な

生物はお互いに影響を与えながら、自然全体のバランスをとっています。ですから、たった一種類の生物がいなくなっても、全体に影響が出てきません。たとえば何らかの原因

から、自然全体のバランスをとっています。ですから、たった一種類の生物がいなくなっても、全体に影響が出てきません。たとえば何らかの原因

現在、

生物多様性が危機に瀕しています。生息地の破壊や汚染、野生生物の過剰利用や外来種による在来種の駆逐、少数の種のみを栽培・繁殖するなどの原因が複合的にからみ

られる可能性もあります。生物多様性が失われると、私たちの命や人間の生存そのものも脅かされるのです。

あつて、通常の1000倍のスピードで種の絶滅が進んでいるといわれています。「多少生物がいなくなってもいいじゃないか」という人もいますが、いまの状況は飛んでいる飛行機のビスを1本ずつ抜いているようなものです。何本抜いたら飛行機が空中分解するかはだれにもわかりません。しかも、ビスはつながっていますから、1本抜けばほかのビスも次々と抜けていきます。本当に危ない状況なのです。

このままでは、

生物多様性は

で、ある毛虫がいなくなったとしましょう。その毛虫をエサとしていた小鳥は生きていけなくなるでしょう。その小鳥を食べていた猛禽類もいなくなってしまうでしょう。森は、鳥のフンや死骸が提供していた栄養分を失い、植物も生えなくなってしまうかもしれません。

私たちが人間も

ひとつの生物種と

して大きな「つながりの連鎖」の中に生きています。多様な生物が存在しているおかげで、私たちはさまざまな食料や産業に必要な原料を得ています。私たちが現在使っている薬の60%は自然の産物からつくられたものだといわれます。まだ発見されていないものも含め、さまざまな生物がいざれガンをはじめとする多くの疾病に対する重要な薬を提供して

ますます劣化していってしまうでしょう。では私たちはいったいどうしたら、生物多様性を守るための取り組みができるのでしょうか？日本では、人間が必要な薪などを得ながら手入れをすることで、自然を守るという「里山」が、生物多様性の保全にとっても大きな役割を果たしていました。薪や炭が石油やガスに取って代わられるにつれて、私たちの暮らしは里山から離れ、里山に思いを馳せることもなくなってしまうしました。でもこれから、生物多様性について考えたり取り組んだりするうえで、「里山」は大きな鍵を握っていると思います。その思想やライフスタイルには、たくさん学ぶべきことがあると思うのです。



Junko Edahiro



縄文杉

© 森田敏隆



日本では野外に生息するものは絶滅してしまったトキ



夕日に染まる流水

© 森田敏隆 © 森田敏隆



釧路湿原



屋久島



日本の ゆたかな 生物多様性

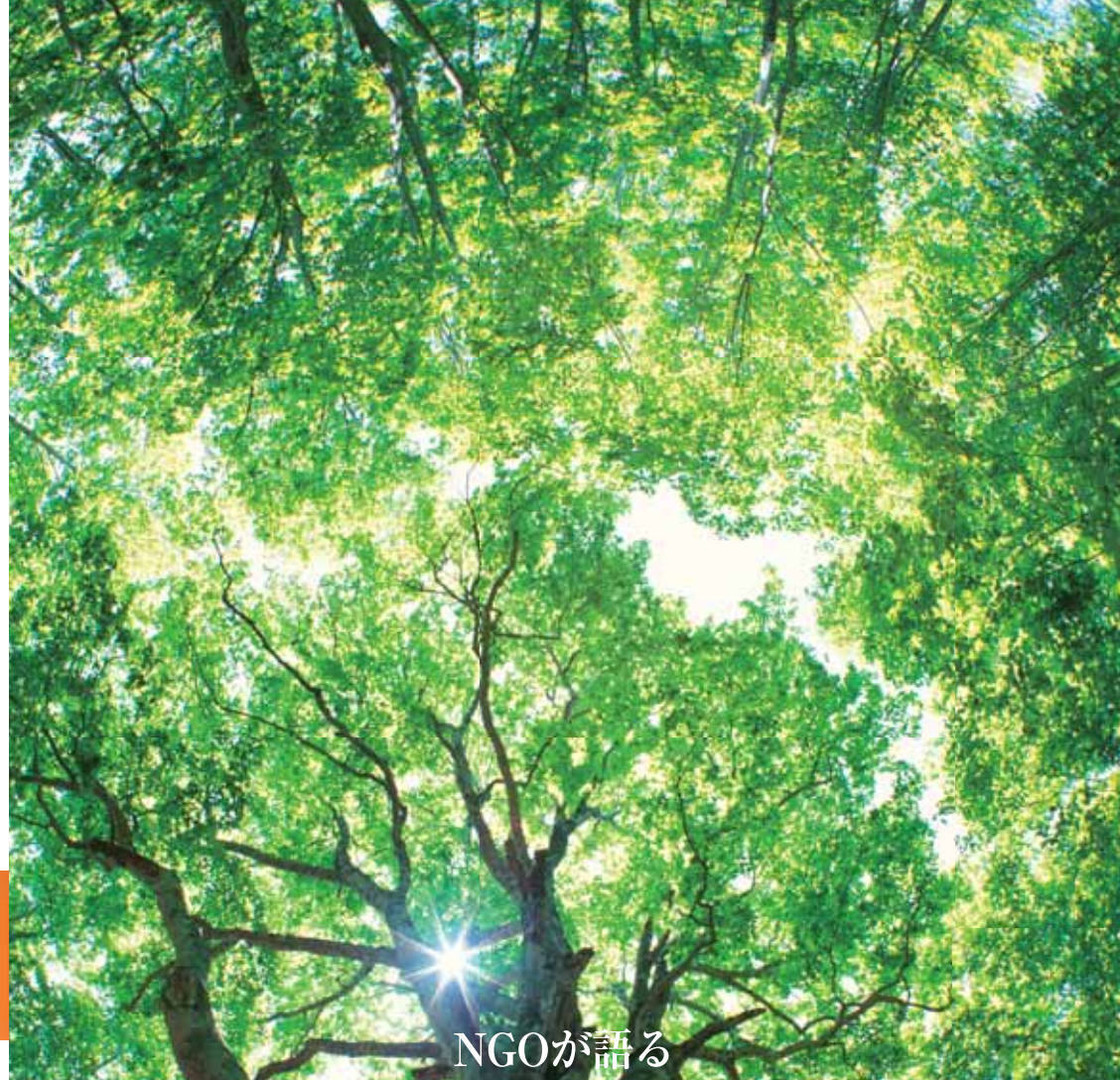
地 図を見れば一目瞭然なのだが、日本は、四方を海に囲まれ、南北に細長く伸びている。複雑な海岸線もち、鳥の数は約7000。気候的には、北海道の亜寒帯から南西諸島や小笠原諸島の亜熱帯まであり、はっきりとした四季が訪れる。こんな地理的、気候的条件が、日本列島にさまざまな種類の生き物たちが生息できる条件を育んできた。アザラシがいる海とサンゴが育つ海、その両方を併せ持つのが日本の自然の特徴なのだ。周辺の国々や、同程度の面積をもつほかの国々と比べても日本には豊かな生物多様性があり、日本にしか生息しない固有種の割合も高い。しかし、その多様性はなにもしなくても存続していくものではない。私たちの暮らしに密接にかかわる生物多様性を守っていくために必要なこと、できること、それを一緒に考えてみませんか。



石垣島 白保のアオサンゴ群落



白神山地



NGOが語る

ニッポンのエコツーリズム 日本は生物多様性の宝庫

住んでいるからこそ見えづらいのが日本。
実は世界にも類を見ない生物多様性をもった国なのである。
この自然を今後も維持していくにはどうしたらいいのだろうか。
世界的な活動を続けるNGOの二人のプロフェッショナル
日比保史さん(コンサベーション・インターナショナル ジャパン代表)
鈴江恵子さん(バードライフ・アジア事務局長)とともに、
日本のエコツーリズムを考えてみました。

草野満代 (以下草野)

まずお聞きしたいのですが、なぜ生物多様性は重要なのでしょう。

日比保史 (以下日比)

生物多様性とは生物学者が使う言葉のようですね。これには生物の種類が多様という意味のほかに、地球全体で、生物に十分な多様性が保てていないと、生態系のバランスが崩れ、いずれは人間も生きていけない環境になるという示唆を含みます。生物多様性の本質はむしろここにあると思います。国際的には、生物多様性が暮らしや経済の基盤であるという考え方が浸透してきています。

草野 では現在の地球の状態はいかがですか。

日比 危機的状況と言わざるを得ないでしょう。地球上の生き物は何度かの絶滅期を乗り越えて、現在のような動植物の構成に落ち着いたわけですが、近年の生物多様性の状況を指して、第6回絶滅期であると言う研究者もいます。しかも過去5回とは違い、今回は人間が関与して

いる。これがスピードと規模を拡大させていて、ミレニアム生態系評価では約1000倍とも言われているんです。

草野 それはわれわれが認識している以上の、まさに桁違いの速さですね。

日比 現在、既知の総種数は175万種、知られていない生物を含めると諸説ありますが、500万〜3000万とされています。近い将来、両生類や哺乳類の2〜3割が絶滅するのではないかと、言われています。そうなれば、私たち人間の生存基盤が大きく損なわれることになると危惧しています。

鈴江恵子 (以下鈴江)

バードライフは鳥を指標にして重要な自然環境を選定し、保全するIBA (Important Bird Areas) 事業を実施しており、世界で約1万か所、日本では167か所を指定しています。世界の鳥類は1万種のうち、近い将来絶滅がやぶまれる絶滅危惧種が200種ほど登録されており、日本ではノグチゲラが絶滅危惧I

※1 国連の呼びかけのもと、2001年に発足した世界的プロジェクトで、生態系がもつ水や食料を持続的に供給する能力などが地球規模で評価された。

チビコト 環境 鼎談

国際環境NGO
コンサベーション・
インターナショナル
日比保史



Yasushi Hibi

コーディネーター
草野満代



Mitsuyo Kusano

国際環境NGO
バードライフ・
アジア
鈴江恵子



Keiko Suzue



Keiko Suzane

国際環境NGO バードライフ・アジア 鈴江恵子

すずえけいこ●バードライフ・アジア事務局長。環境共生学博士。各国の政府やNGO、NPOとの緊密な連携によってプロジェクトを進行させる一方で、人材育成にも力を入れている。

A類に、何とか増やそうと努力を続けているコウノトリやコアホウドリなどが絶滅危惧IB類に指定されています。バードライフ・アジアではアジアの鳥類版レッドデータブックの作成のための調査も行っていますから、日本のみならず、世界的に鳥類の未来も差し迫った状況にあると明言できますね。しかも鳥だけでなく、蝶などの昆虫類にも名前が挙がるものが増えてきました。哺乳類だけでなく、鳥も昆虫も植物も例外なく、総じて生息が危ぶまれているわけです。

草野 野生絶滅種であるトキを守るために努力されていますが、そこにかかっている人手もコストも少なくありませんよね。
鈴江 目前の絶滅の危機を回避する努力は大切ですが、抜本的

日本列島全てが世界に誇る貴重な財産

鼎談 日本は生物多様性の宝庫

あり谷ありと高低差もありますから。水も豊かです。生物多様性という見地であれば、世界に誇れる国といえますね。
日比 しかも温暖で、土地は肥沃となれば人が住みやすい環境ですから人口も多い。とはいえない山が多いですから、自然と共存している場所が非常に多くなります。他国、たとえばアメリカなどは広大ですから、ここを守ると決めたら、外部と遮断することもできる。自然と都市が明確に線引きされているわけですが、日本は徐々に都会になり、自然となる、グラデーショナルの部分をもっている。いわゆる里山の存在、これが大きな特徴ですね。

ひしと伝わってくるのですが、止める手立てはあるのですか。
鈴江 難しいですね。さらに破壊が進めば人類挙げて考えるでしょうけれど。しかもいまやらなければ手遅れになるとわかっているのに、回答が見つからないのが実情です。お金至上主義の価値観の変換しか、近道はないといえるかもしれません。
日比 日本の緑を守るために、

な解決にはなっていないから。やはり動植物を育てるのは自然しかない。だからこそ、環境や生態系を守る必要を訴えていかなくてはならないです。
草野 2005年に日本がコンサベーション・インターナショナルによって、ホットスポットに選定されているようですが、これはどこを指すのでしょうか。
日比 日本列島、北は北海道か

ら南は沖縄まで全域がその範囲です。われわれの言うホットスポットとは動植物が豊かだけれども7割が失われて危機に瀕していることを意味します。これは100羽いたものが30羽になったということではなくて、そこにしか棲まない生き物の生息域の7割が失われたということ。その残った3割に例えばシダ植物や種子植物といった日本固有の維管束植物は1950種いるんです。
鈴江 日本の生態系の多様さは世界屈指です。流水が流れてくるような寒いところから、サンゴが生息する暖かいところまですべてを含んでいる。しかも山



国際環境NGO コンサベーション・インターナショナル 日比保史

ひびやすし●CI日本プログラム代表。野村総合研究所、国連開発計画を経て2003年より現職。地球温暖化についても造詣が深く、広い視野をもち、自然保護活動を行っている。

東南アジアやロシアなどから安い材木を輸入する。すると伐採が進み、現地の生態系が破壊されてしまう。でも現地の人たちは、生活していくために必要なら伐採を続けざるを得ません。今日の食料に困っている人に、明日の姿を説いても説得力はありません。一筋縄ではいかないのが実情です。国際社会全体で、自然保護と経済を天秤にかけてバランスを取らねばならない。
草野 里山のお話が出ましたが、こちらも注目はされているものの、状況は好転していないように思います。地方の方々とお話をさせていただくことが多いのですが、里山の荒廃と気候の変

国際環境NGO コンサベーション・インターナショナル

Conservation International

1987年に設立された民間非営利の国際NGOで、自然生態系と人との関わりを重視し、環境問題を解決することが目的。世界の生物多様性保全活動において、先駆的役割を果たし、世界40カ国以上で800名のスタッフが活躍している。活動地域の多くが生物多様性において危機的状況エリアだ。またそこで働くスタッフのほとんどが現地国民で構成されているのも特徴。同NGOでは地球規模で生物多様性の再評価を実施結果、緊急かつ戦略的に保全すべき地域として世界34か所の「ホットスポット」を発表。そのひとつに日本列島全体も選定されている。



<http://www.conservation.or.jp/>

国際環境NGO バードライフ・アジア

BirdLife Asia



鳥類を指標として、その生息環境保護を目的に活動する国際環境NGOバードライフ・インターナショナル(本部・英国ケンブリッジ)のアジア部門。現在105か国に250万人のネットワークを持ち、アジアでは14のパートナー団体とともに、生物多様性や生息環境保全の活動を推進している。これまでアジア全体で絶滅の危機に瀕した鳥類の状況をまとめたアジア版鳥類レッドデータ・ブックの刊行、スマトラ島の低地熱帯林保全キャンペーン、渡り鳥の生息地を保全するフライウェイ事業、ラムサール条約湿地保全など、広範に亘り活動を行っている。

<http://www.birdlife-asia.org/>

化が相関して、悪循環を引き起こしていますよね。土砂崩れや鉄砲水もある。守る必要は感じているけど担い手がいない。さきほどの経済面も地方にとつては大きな問題となっています。

日比 豊かな生態系は、人間にさまざまな資源やサービスを提供してくれず。日本の動植物は多様なわけですが、魚介類やキノコ類、木材、しょうゆや味噌、酒を造るときに欠かせない菌など、多くの生態系サービスの恩恵を受けています。土壌流出を防いだり、水質浄化なども自然がもつサービスのひとつ。また、広く自然の恵みと考えれば温泉も当てはまります。生態系が多様であれば、享受できるサービスも豊富ということになる。

草野 つまり自然から受ける恩恵というわけですね。しかも日本の文化にとつても欠かせないものばかりですね。

鈴江 日本に何千年にも亘って培われてきた里山文化があればこそ、こうした多種多様な生態系サービスを生活に取り入れることができたわけです。

草野 世界的にエコツーリズムが盛んで、日本でもこうした考え方が浸透してきているように思うのですが、たとえば海外のように国立公園などを活用する方法はないでしょうか。

日比 日本と海外では国立公園に対するスタンスが違います。たとえば釧路湿原などは湿原のすぐ近くで農業が営まれている。本来人が住んでいたところが国立公園や保護地域に指定される場合もある。それほど日本人と



Mitsuyo Kusano

草野満代

くさのみつよ ●フリーアナウンサー。1989年にNHK入局、97年よりTBS「筑紫キャスター」を9年務め、現在まで幅広い分野で活躍中。

ルが望ましいと思うんです。たとえば恋愛や飛騨、白川郷のように、自然と文化が連携できている場所がある。ここが日本の特異性であり、素晴らしい点。他国が真似したくてもできないところ。学校の環境教育に取り入れてもいいでしょうし、国立公園にある生態系を利用し、土地の文化を並行して教えることができれば、日本の里山文化を若い世代に伝えることができるのではないのでしょうか。

草野 世界的に日本の自然との関係が特殊であることがわかりました。しかも自分たちが守られなければ、日本固有の動植物を危険に晒してしまうわけですし、もつと特別な意識を持たないといけませんね。

日比 自分の住んでいる場所を特別だと認識するのは難しいことです。でもこれだけグローバル化が言われているのですから、新しい視点を持って日本を見るのが重要になってくるでしょう。海外に行くとかわかるのですが、日本は色を表現する言葉が

自然の関係は密接に絡んでいるんです。すでに共存し、生態系を維持や保全を意識した生活パターンがあったわけですから、欧米式のエコツーリズムの考え方も真似したり、そのまま輸入しても意味がないように思う。

日本はこれだけ経済が発展し、都市化が進んでいるわけですから、彼らと同じスタンスで自然を守っていくことはできないんです。地域の担い手にすべてゆだねるのではなく、企業に参加してもらおうとか、新しい方法を取り入れた方がいい。また、先に話に出た里山など、日本の伝統的な知恵には、自然との共生を考えたものも多い。これらの考え方は、人口増加の続く開発途上国でも応用できるかもしれない。

鈴江 そろそろ個人や地域、行政の枠を外した、日本独自の方法を模索すべきかもしれません。そうしたスタイルが出来上がったときに、国立公園や保護地区などの存在がさらに生きてくるはず。国立公園と近くの街が共存共栄できるようなスタイル

豊富です。それは植物や動物、空や大地と、自然が表現する色が豊かだったからこそでしょう。たとえば都会にあつても、こうした日本人としての意義を見出せない、自然を守る意味がわからない。植物、動物、昆虫、魚

鼎談 日本は生物多様性の宝庫

日本独自のエコリズムを世界に発信



鼎談では日本、アフリカ、東南アジア、ヨーロッパとグローバルに話題が展開していった。

など、地球の貴重な財産を抱えている国だと、わかってもらいたいですね。

鈴江 里山が荒廃してきたといつてもまだ100年弱です。まだ記憶や知恵が少なからず生きているうちに、新しい感性で里

できるし、途上国も自然を守りつつ、経済発展ができるという見本になりえるでしょう。

草野 日本発信のエコリズムが世界を変えるかもしれない。そのために個人として何ができるか、考えてみたいと思います。

コンサベーション・インターナショナルにおける生物多様性ホットスポットとは？

1 500種類以上の固有植物種を有しているにもかかわらず、本来の生息地の70%以上を喪失しており、保全の重要性が極めて高い地域を指す。生物多様性の分野では、絶滅の危機に瀕した、多様な生物が生息している重要な地域という意味をもつ。保全活動や予算の重点化に悩む保全活動家のため、イギリスの生態学者ノーマン・マイヤーズが1988年に提唱した。コンサベーション・インターナショナル(CI)では、マダガスカルやフィリピン諸島、チリ中部など、世界中で34のホットスポットを選定し、重点的に保全活動を実施している。指定された地域の総面積は地球上の陸地面積の2.3%と狭小ではあるが、全世界の50%の維管束植物種と、42%の陸上脊椎動物が生息している。2005年の再評価に際し、日本列島もホットスポットのひとつに追加されている。

Column

みくに・きよみ●帝国ホテル、フランスの
三ツ星レストランなどで修業を重ね、1985年に
東京・四ツ谷に「ホテル・ドゥ・ミクニ」をオープン。
近年では子どもたちの味覚を育てる食育活動にも
精力的に取り組んでいる。

本日の主役は青森・下北半
島から届いたサクラマス。
毎月、三國シェフが気になる
旬の食材をピックアップし、
コメントと詳細情報を
ホームページの「最旬 ニュ
ース」にアップしている。
出かける前に、要チェック。
www.oui-mikuni.co.jp



1 生物多様性 × 食

三國清三さん
[シェフ]

食

べものは僕たちの生命とあま
りにも密接に関わっているの
で、食べるという行為は自分
の生命そのもの。まずそれを大前提に
考えてほしい」。三國シェフに、食べ
る楽しみって何だろう？ と聞いてみ
たら、ひときわ力のこもった答えが返
ってきた。

・自然派 フランス料理店として、い
ち早く無農薬や有機栽培野菜を使い始
めた料理界の異才は、食材をとおして
さまざまな情報に触れる。

「でもね、100%無農薬ってほんと
うに大変なことです。人に害のない農
薬の使い方、低農薬であれば正しいわ
けです。そのことに途中で気づきまし
た」。そうやって段々、野菜のつくり
手に会いに出かけるように。これまで
誰よりも早く、メニューに食材のつく
り手の名前をそつと添えたのも、実は
三國シェフだ。

四ツ谷の店のメニューは一年に12回
月毎に変わる。「4月は4月の旬の食
材があるから」。さらに。「例えばアス
バラ。最初の出始めのころは「走り」
と呼びます。月半ばに「旬」になって、
最後が「名残」と言ってちよつと枯れ
た感じ。どの野菜も旬を挟んでだいた
い1か月でゆっくりと変化していく。
そして春夏秋冬があつて、全体として
大きく変わっていくんですね」。

特に私たち日本人は、季節の微妙な
移ろいに対して敏感な感覚と舌を持っ
ているといわれる。ところが、これら
が、鈍り始めているかもしれない。
食材は本来の旬を無視して、ハイテク
ノロジーによって、または気候が異な
るよその国から、通年お取り寄せ状態
だ。この理由のひとつに、三國シェフ
は私たちの嗜好の変化を挙げる。

「自分のごく周辺にあるものよりも、
さらにもつと外の文化を取り入れて、
吸収して、新しいカルチャーを生み出
す。戦後、すべてがそういうサイクル
になったんです」。しかしだからこそ、
いまの日本がある。よしとしようじゃ
ないかと、三國シェフは言う。大事な
のはこれから。まだ、絶望的ではない。

近年、イタリアの「スローフード」
から、食の多様性を見直すことを学ん
だ。そしていま、「フードマイレージ」
のような、かつてとは逆のうねりが起
こっている。なるべく自分の住んでい
る場所の近くでつくられたものを食べ
よう、という考えだ。

ところで、良い野菜ってどんな野菜
のことでしょう、三國シェフ。「野
性味がある。青臭さがある。その野菜
本来の味がある。でも、これもひとつ
の嗜好。今の若い親御さんたちは香り
や味があると食べないですね」。
だから人も、アクの抜けたさっぱり
無味無臭タイプが増えている？ 個性
ある多様な食材で、味わいのある人
になりたいものだ。

料理は自然界と人を つなぐゲートウェイ。

Food

食、芸術文化、旅、都市生活など日常生活のシチュエーションから、
ゆたかな生物多様性を理解していきましょう！

五感で感じる生物多様性



右／太陽の光があたたかく差し込んでくる裏山で。子どもたちは、ここに来ると拾った枝1本で、いつまでも楽しく遊んでいる。この環境を次世代に残したいから、亜紀さんは農家を継いだそうだ。上／春もまだ浅いのに、山の斜面にはフキノトウが芽を出していた。



五感で感じる
生物多様性

3

生物多様性

×

旅

石坂亜紀さん

[石坂ファームハウス]

五感で感じる
生物多様性

2

生物多様性

×

音楽

吉田恭子さん

[ヴァイオリニスト]

「フェルナンブーコはブラジルが主な生産国なのですが、現在では輸出も制限されています。よくヴァイオリンの価格が取りざたされますが、実は弓も名作となると1本3000万～5000万円の値段がつくこともあります」。森林破壊には思いもよらない影響力があるのだ。



都心からすぐの“里山”で 生き物の 多様性を感じてみよう。

Travel

新 宿から急行で西へ30分。駅周辺から住宅が広がる聖蹟桜ヶ丘だが、20分も歩けば、畑や雑木林がちらほらと現れてくる。東京・日野市で100年以上も農家を続ける石坂ファームハウスは、そんな場所にある。背後には竹やナラ、クヌギが繁る小山。そこで集めた落ち葉は畑や果樹園（リンゴやブルーベリー）の堆肥になり、薪はボイラーの燃料になる。田んぼでは米づくりも行っている。

裏山、田んぼ、畑、そして人の営み。それらが互いに補完し、豊かな生態系を生み出す、そんな日本の里山の姿が、石坂ファームハウスにはまだ残っている。「裏にはタヌキもくるし、シジユウカラ、メジロなどの鳥、セミやカブトムシなど昆虫も。手入れされた明るい雑木林だからです」。そんな石坂亜紀さんの言葉は、東京でも、環境さえ整えばさまざまな動植物たちが生息できることを教えてくれた。

毎月開かれる「自然の恵みを楽しむ会」では、よもぎ団子づくり、わら細工講座、餅つきなど昔ながらの伝統行事や食習慣に触れながら、里山の豊かな恵みを実感できるという。東京の里山、あなたも訪ねてみませんか？

いしざか・あき●両親とともに石坂ファームハウスで農業に携わる跡取り娘。自分が農家を継ぐことが、この環境を守ることにつながると実感。今は育児と農業の両立で大変な日々。

森なくして クラシックの音色は 生まれてこない。

Music

吉 田恭子さんは、小中学生にクラシックの楽しさを伝える『ふれあいコンサート』を定期的に開催している。その会場に携えていくのは300年以上前に作られたヴァイオリンだ。

「最近の子供たちは何かが壊れてしまっても、『次があるから』とあっさりしたものだ。このヴァイオリンは何代もの持ち主を経て、現在は私が使っています。弦楽器の最大の魅力は300年経っても骨董品にはならず、触れたり、演奏したり、何よりその奏でられる音でたくさんの方が感動を味わうことができること。人間は愚かなこともしますが、モノを受け継ぎ、守り続ける素晴らしい感性を持っている。そういう人の力を感じてもらいたくて」

彼女のヴァイオリンが作られたころは、現代より平均気温が低く、材料である松の木も目の詰まったものだったという。温暖化が進むいま、当時と同じレベルの木材を得ることは望めない。また弓に使われるフェルナンブーコという木もまた、乱伐により絶滅危惧種に指定されるまで減少してしまっただけで、美しい音色は、豊かな自然によって、作られているのである。

よしだ・きょうこ●桐朋学園大学卒業後、英国ギルドホール音楽院、米国マンハッタン音楽院へ留学。国内外で数々のベストソリスト賞を受賞。2004年から定期的に「ふれあいコンサート」を開催。www.kyokoyoshida.com/



右/下町では、よく家の前にずらりと植木鉢を並べているが、佐々木さんはその要領でカフェの前を、移動できる「お散歩プランター」で彩っている。上/こんなふうにも引張って移動できるようになっている。太陽を求めてどこにでも連れていけるのだ。



五感で感じる
生物多様性

5

生物多様性
×
都市

佐々木真一さん
[デザイナー]

右/築地に嫁いできて19年になる平野さん。ここ場外市場は、すっかり馴染みの場所になった。鮮魚はもちろん、数軒ある八百屋に並ぶものでも季節の変化を感じることができる。下/魚屋には、近海で獲れたものから、はるか遠い海のものまで、多様な魚が並ぶ。



五感で感じる
生物多様性

4

生物多様性
×
買い物

平野文さん
[声優・エッセイスト]

ちょっとした工夫で、
都会でも生き物が
見つけられる。

City

植 物を使った空間デザインで独特のセンスを見せるデザイナー1の佐々木真一さん。北海道と埼玉県の西部で育った佐々木さんにとって、「外」の世界はさまざまな動物、昆虫、植物にあふれた「遊びの宝庫」だったそうだ。

「北海道と埼玉を歩き来していたときは、動植物の種類が違うことに驚きました。北海道の川にはマス類が多いけれど、埼玉ではコイやフナがメイン。埼玉では田んぼにはまりました。今でいう里山で、裏の山で遊んでいたら、カエルの声が聞こえるから田んぼに行く。カエルを探しているうちに、ザリガニを見つけて、それを獲ることに夢中になる、そんな日々でした」

今、国立に住む佐々木さん、都心に比べればまだ自然が残っているという。ちよつと足を延ばせば、きれいな湧き水が流れる場所があり、多摩川もずいぶんきれいになっているそうだ。

「等々力渓谷も行くとはっとしますね。でも、庭やベランダに実のなる樹を植えば、虫や鳥が集まってきます。そんなちよつとした工夫で、都会でもいろいろな生き物と触れ合うことができますよ」

ささき・しんいち●デザイナー。オランダ国立園芸デザインマスターの資格をもつ。フラワーデザインから空間デザイン、リフォーム、料理まで、柔軟な発想で独特の“佐々木ワールド”を展開する。

世界中から
旬の魚が集まる築地は、
生物多様性の宝庫。

Shopping

幼 い頃から「花より団子」でした」と笑う平野文さん。「母がよく、『初物よ』という言葉を使っていました。カツオや食後のブドウやミカンで、季節の訪れを感じていました」。

東京の山の手で育った平野さんが、築地の魚河岸で働くご主人のところに嫁いだのは平成元年。以来、「魚」の存在は平野さんのなかでぐんと大きくなった。「市場に並ぶ魚で旬や四季を感じるようになりまし。また、サンマなどは8月に北海道の北の海で試験的に獲ったものが築地に入ってくるので、ひと足早い旬なのですが、かえって日本が南北に長いことをあらためて実感したりしました」。

魚のプロたちに囲まれているうちに、豊かな森が豊かな海をつくること、1匹の魚を余すことなく食べることに、安全な海域で正しい漁法で捕った魚があること、養殖でも天然に負けない質の高いものに挑む若い人たちがいること。平野さんはこうした多くのことを学んだという。世界中から魚が集まる築地。その多様性を守るためには、世界中の人たちが動きはじめている、そんなことを感じさせてくれた。

ひらの・ふみ●子役、ラジオのDJを経て、アニメ「うる星やつら」のラム役で声優デビュー。1989年、築地魚河岸に嫁ぐ。著書『お見合い相手は魚河岸のプリンス』がNHKでドラマ化され話題に。

豊かで良質の“水”を守ることが、 多様な生物が生きる環境を育む。

企業活動が、
生物多様性に
つながっていく。

企業の活動自体が、自然や環境の保護、
ひいては生物多様性の保全につながっている――
そんな企業が日本にはたくさんある。
そのなかから、サントリー、イオン、積水ハウスの活動を紹介します。
まずは、“水”と深いかわりをもつサントリーの取り組みから。



サントリーの商品は、
ウイスキー、ビール、
天然水など、すべて
水や穀物など自然の恵みでつく
らせてもらっています。いわば、
それが経営の基盤です。ですから、
昔から環境への意識は高かった

です」
サントリーの企業としての環
境に対する姿勢をそう説明して
くれたのは、環境部長の高屋雅
光さん。
サントリーの環境保護の始ま
りは1963年にまで遡る。武

ウイスキーづくり50周年の記念
事業としてスタートした愛鳥キャ
ンペーン。野鳥の渡りの中継地点
にあたる山梨県にある白州蒸留所
周辺のアカマツ、クヌギ、ナラな
どの森の中にバードサンクチュ
アリを設けた。自然と野鳥の観察路
が巡らされ、シジュウカラ、エナ
ガ、カッコウなど年間約50種の
鳥の姿を見ることが出来る。



山梨の白州蒸留所を流れる清流。

企業と自然の 共生の姿

こうした活動は、もちろん、生
物多様性の保全“だけが目的で
はない。サントリーという企業
のモノづくりの基盤を守り、こ
れからも持続可能な企業活動の
継続を考えたときに、企業とし
てなすべきことはなにかを考え、
実行したその結果だ。
鳥を守ることで、鳥たちが棲
める森や山を育み、水源地の森
を整備することで、そこに鳥を

はじめとする多様な動植物が棲
息できるようになる。企業活動
が、豊かな生態系の維持につな
がっているのだ。
2003年から行われている
「天然水の森」と名づけた水源
の森林保護活動は、全国9か所
で展開され、森の管理を専門に
行うグリーンキーパーという役
職がある工場もあれば、全社員
が参加し、環境省の方法に準じ
て自家ぶどう園に棲息する動植
物を調査する「緑の国勢調査」
を毎年行うワイナリーもある。
各工場が、森の所有者、地元の

蔵野ビール工場に廃水処理設備
を導入し、水資源保護に乗り出
した。そして73年に野鳥の保護
を通じて自然保護活動に取り組
む「愛鳥キャンペーン」をスタ
ートした。
「鳥の棲めないところには、人
も住めません。逆に言えば、鳥
たちが暮らせる環境は、人にも
やさしいはず。そんな考えから、
愛鳥キャンペーンは始まりまし
た」と高屋さん。
同年、山梨の白州蒸留所の敷
地内に、民間企業としてははじ
めて「バードサンクチュアリ(野
鳥の聖域)」を開園。90年には「サ
ントリー世界愛鳥基金」を創設
し、国内外の鳥類保護団体への
助成を続けている。

自然保護団体、行政、森林組合
などと一緒になり、それぞれが
地域の自然環境を守るために活
動する、それがサントリーとい
う企業なのだ。
「人と自然と響きあう……。こ
れがサントリーのコーポレート
メッセージで、04年からはより
わかりやすく、水と生きる」と
いうコーポレートメッセージを
打ち出してきました。その企業
理念を実現し、私たちにとって
大切な資源である水を守るため
の森林保護ですし、生物多様性
の保全です。一朝一夕で結果が
出るものではありませんが、長
いスパンで見て、今、やらなけれ
ばならないと思います」

サントリーと自然との関係を、
高屋部長は、そう締めくくって
くれた。



Masahisa Takaya
サントリー株式会社
CSR・コミュニケーション本部
環境部長
高屋雅光さん

イオン株式会社

食卓にのぼる“魚”の 多様性を守っていくために。

身近なところで生物多様性を実感できる場、
それはスーパーマーケット。イオンは、
企業として“魚”の多様性の保全に一役買っている。



この青いマークが、通称「海のエコラベル」と呼ばれるもので、MSC認証を受けた海産物であることを示している。現在、イオンで販売しているのは左の写真にあるような塩紅鮭、いくら、たらこ、明太子など。ほとんどがアラスカ産。価格的にも、認証を受けていないものと差がなく、もっと多くの人に知ってほしいマークだ。



通

称「海のエコラベル」、MSC (Marine Stewardship Council: 海洋管理協議会) 認証を「存じ

だらうか。いつまでも魚を食べられるよう、水産資源や海洋環境を守って獲られた水産物に対して与えられる証で、認証を得た海産物は、青地に白い魚が浮かぶかわいらしいマークをつけて販売することができる。

この「海のエコラベル」のついたサケやタラコ、イクラ、タ



MSC認証を受けた漁業を行うアラスカの漁師たち。

ラを、2006年から、販売を開始したのがイオンだ。

そもそもイオンは、「おいしいものを、自信をもって消費者にお薦めしたい」という気持ちで食品を揃えてきた。そのためには、自分たちで独自の仕組みをつくり、食材や食品がどういう経路を辿って店頭で並んでいるのか、確実に把握できるように取り組んできた。食への関心の高まりや狂牛病の影響もあり、野菜や畜産物ではトレーサビリティを、2006年から、販売を開始したのがイオンだ。

MSC-COC も取得

さらに、MSC認証を受けた魚介類が、水揚げ後に非認証製品と交ざらずに正しく加工・流通されるためのライセンス「MSC-COC(Chain of Custody)」も取得し、プライベートブランド商品づくりや、店内加工で、消費者のニーズに応えられる体制を整えている。

「それまでは、この魚はどの海

ティを確立しやすかったが、海産物ではいろいろと模索していたのが数年前のことだったという。「イオンでは、まず持続的な生産が可能で、品質のいいものをということで『おさかな牧場』と名づけて養殖に重点を置いてきました。しかし、養殖できる魚の種類は限られています。日本は、本来、魚食の文化があつて、地域や旬によってじつに多種多様な魚を楽しんで食べてきました。養殖では、そこまでをカバーできない。また、海はひとつ。天然の魚も養殖の魚も共有している財産です。やはり天然ものの魚でも、環境に配慮した、トレーサビリティのあるものを、と考えていたときにMSC認証の魚を、会社として販売しようという決断につながったのです」

イオンで長く海産物の仕入れを担当してきた水産商品部部長の南谷和彦さんは、MSC認証魚介類を取り扱うようになった経緯を語ってくれた。

で、誰が、どのように獲ったのか、など気にしたこともなかったのですが、MSC認証の魚介類を扱うようになり、アラスカの漁場にも行き、実際に漁の現場も見ることができました。品質だけでなく、それ以外の取り組みなども見るなど、仕入れに対する社員の認識も変わってきています」と南谷さん。

MSC認証の魚を売ることは、持続可能な漁業を営む人々を支え、ひいては海産資源の多様性を保全することにつながる。この秋には、日本でも初めてMSC認証を受ける漁業が出るかもしれない。もちろん、その商品はイオンの店頭で並ぶことになるだろう。



Kazuhiko Nanaya

イオン株式会社
食品商品本部 水産商品部
部長
南谷和彦さん

積水ハウス株式会社

庭を、多様な生物が棲む 小さな“里山”に。

住宅メーカーの積水ハウスが展開する「5本の樹」計画。
樹を植えることが、さまざまな生き物たちを
庭に呼び込み、小さな生態系をつくってくれる。



新領域デザイン部門で、2006年度グッドデザイン賞を受賞した「5本の樹」計画。より多くの人に知ってもらうため、さまざまなカタログやパンフレットが用意されている。なかでも秀逸なのは、全国を5つのエリアに分け、そこにあった雑木とそこに集まる鳥や昆虫を図鑑風にまとめたカタログ。眺めているだけでも楽しい。

2

001年、積水ハウスが打ち出した「5本の樹」計画は、従来の住宅の庭づくりの概念を大きく変えるものだった。「鳥のために3本、蝶のために2本」と、象徴的に5本と語っていますが、ようは日本それぞれの地域の自生種、在来種の樹を庭に植え、鳥や昆虫など多様な生き物が集まる場所にしませんか、そういう提案なのです」積水ハウスの環境推進部長の乾和也さんは、「5本の樹」計画



「5本の樹」計画によって造られた庭。

のコンセプトについてこう説明してくれた。しかし、自生種や在来種とは、いわばその地域ではあたりまえの樹木。雑木と呼ばれ、庭木として、わざわざ手をかけて育てる木ではない、というのが一般的な考え方だった。「NGOシエアリングアース協会のナチュラリスト、藤本和典さんと出会って、その考えは大きく変わりました」

り社員も勉強を重ねています。また、大阪本社のある新梅田シティに「新・里山」をつくったのも、より多くの人に里山のよさを感じていただきたいから」その梅田には、昨年、生態系の頂点にいるモズが巣をつくった。それは、モズの生命を維持するだけの生物が、そこに存在することを意味している。「まさかモズまで来るとは思わなかった」と藤本先生が語るほど、大阪の新・里山は豊かになっているようだ。

てくる」ということ。それを庭づくりには生かそうと、藤本さんの協力を得ながらつくったのが「5本の樹」計画だ。「里山」を手本にした庭づくりは、それが線、そして面へと広がっていくことで、地域の生態系の再生・保全へとつながる可能性も示唆する、壮大で夢のあるものなのだ。

庭からはじまる 生態系の再生

当初はいろいろ苦勞もあつたが、世の中の環境意識の高まりや自然回帰のムードのなか、積水ハウスの造園部門は順調に売り上げを伸ばしているという。「社員も『5本の樹』計画の意義をきちんと理解していないとお客さまに勧めることができません。社内で藤本先生の自然観察会を開いたり、社内資格のグリーンエキスパートを設定した

06年の植栽実績は75万本。これはまだまだ増えていきそうだ。「日本の豊かな生物相は、南北に長いという地形と、温帯で四季があるという気候によるところが大きい。木も、鳥も、虫もそれぞれの地域で違うものを見ることが出来る。そんな日本に暮らす私たちは幸せではないでしょうか」

地域の生態系が、庭から再生されていく。そして、街全体が里山のように多様な生き物が暮らせる場所になっていく。積水ハウスの「5本の樹」計画の未来には、そんな姿が待っているかもしれない。



Kazuya Inui

積水ハウス株式会社
環境推進部長
乾和也さん

生物多様性

約40億年前に、地球上に出現した生命は、多様な進化を経て分化し、生息場所に応じて、それぞれに関係を築きながら地球上の生態系のバランスの中で生活している。このように、互いにつながりあいながら、多様な生物が存在することを生物多様性という。生物多様性条約では、「すべての生物の間の変異性をいうものとし、種内の多様性、種間の多様性及び生態系の多様性を含む」と厳密に定義されている。

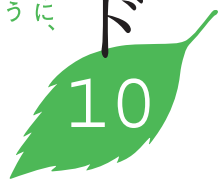
生物多様性条約

正式名称は「生物の多様性に関する条約」。ラムサール条約やワシントン条約など特定の地域・種の保全だけでは、包括的な生物多様性の保全はできない、との認識から提案され、1992年5月に採択、6月にブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開かれた地球サミット(国連環境開発会議)で、各国政府により署名が行われた。①生物多様性の保全、②その持続可能な利用、③遺伝資源の利用から生ずる利益の公平な配分を目的とする。2008年1月までに日本を含む190か国がこの条約に参加している。ただし、アメリカは不参加。条約が採択された5月22日は、「国際生物多様性の日」とされている。

生物多様性を理解するための

キーワード

生物多様性を理解するために、「これは要チェック」というキーワードを10、セレクト。あなたは、いくつ知っていましたか？



ホットスポット

2007年度までに改訂された環境省版レッドリストには、絶滅のおそれのある種(絶滅危惧種・RDB種)としてライチョウやギフチョウ、メダカ、キキョウなど3155種が掲載されている。このRDB種が多種生息・生育している地域など、生態系が豊かであるが、危機にさらされている地域を生物多様性のホットスポットと呼ぶ。生物多様性を確保するためには、RDB種を種として保存することに加え、その生息地であるホットスポットを面的に保全するための対策が必要だ。

SATOYAMA イニシアティブ

日本人が培ってきた伝統的な自然共生の知恵が詰まっている場所、それが「里地里山」。人が自然に手を入れることが適度な攪乱となって、独自の生態系が作り出されてきた、生物多様性が豊かな地域。自然の仕組みを暮らしに生かす知恵と技術、地域共同体による作業やルールなどが継承され、循環型社会、自然共生社会を実現してきた。伝統的な自然共生の知恵は世界各地にあるが、そこに現代の知識や技術を取り入れ、新しい自然共生社会のあり方を世界に提案していこうというもの。

生物多様性の 恵み (生態系サービス)

さまざまな生き物がいることは、私たち人間の暮らしに多くのものをもたらしている。野菜、肉、魚などの食べ物、木材、燃料などは、直接私たちの生活に必要であり、また、多様な生物の遺伝情報は、品種改良や薬、工業製品の開発にも役立っている。そもそも、私たちの生存基盤である空気や水の循環には、生物の多様性に富む健全な生態系が大きな役割を果たしており、災害の軽減や病気の蔓延のコントロールにも役立っている。さらに、役立つものとしての恵みだけでなく、工芸品の意匠・材料として使われ、芸術のテーマとしても人の感情的な部分を揺さぶり、民族固有の文化を生み出してきた。最近では、エコツーリズムなどふれあいの対象としても大切さが増している。

COP10

COP(Conference Of the Parties・締約国会議)とは、国際条約の締約国が集まって開催する会議のこと。生物多様性条約を締約した国々も、およそ2年ごとに集まり「生物多様性条約締約国会議」において、さまざまな国際的な枠組みを決定してきた。その10回目にあたるCOP10は、国連の「国際生物多様性年」である2010年に開催されるが、愛知県名古屋への誘致活動が進んでいる。これを機に生物多様性を含めた環境問題への取り組みが日本において一層進展することが期待される。

第三次 生物多様性 国家戦略

生物多様性国家戦略とは、生物多様性条約に基づき、生物多様性の保全と持続可能な利用に関わる国の施策の目標と取り組みの方向を定めたもの。2度の見直しを経て、2007年11月に策定されたのが第三次生物多様性国家戦略。生物多様性の大切さをわかりやすく解説するとともに、過去100年に破壊された生態系を回復する「100年計画」のもと、生物多様性の認知度アップなど約660の行動計画を示し、ラムサール条約湿地を10か所増やすなど具体的な数値目標も設定されている。

地球温暖化

気候変動に関する政府間パネル(IPCC)が、2007年に出した第4次評価報告書では、CO₂に代表される温室効果ガスの増加が地球温暖化をもたらしたと明言した。さらに、気候変動のさまざまな影響が指摘され、生物多様性についても摂氏1.5~2.5度の地球の気温上昇が生態系を大きく変化させ、約20~30%の種が絶滅の危機に瀕すると報告している。地球温暖化と生物多様性は、密接に関係している。

外来種と在来種

ある地域で従来から生息・生育してきた種を「在来種」、国外または国内の他地域から本来の移動能力をはるかに超えて意図的・非意図的に侵入してきた種を「外来種」という。外来種の侵入で在来種が捕食されたり、駆逐されたりして、従来の生態系への大きな脅威となっている。外来種の侵入には、家畜・園芸・ペット・漁業・輸出入など関係する分野も多岐にわたり、問題の構造はかなり複雑になっている。

スローフード (Slow Food)

1986年、イタリアの小さな町ではじまった、美食&イタリアの文化復興運動組織による地域的・草の根的な運動。89年に国際スローフード協会が設立され、国際的な運動となった。消えゆく恐れのある伝統的な食材や料理、食品の保護、子供たちへの食育、質のよい素材をつくる生産者の保護などを活動の中心にしている。地域に固有の食文化は、その地域の多様な生物や気候風土に支えられている。

”生物多様性“をもっと身近に。

2

07年6月、日本は持続可能な社会の実現に向けて「21世紀環境立国戦略」を閣議決定しました。

そこに明示されている日本の環境政策の三本柱は、「温暖化防止（低炭素社会）」「3R（循環型社会）」そして「生物多様性の保全と持続可能な利用（自然共生社会）」。この3つの政策を統合的に進めいくことが求められています。

「温暖化防止」3Rは、認知度やそれに対する

るみなさんの意識も高いのですが、「生物多様性」は、言葉自体聞いたことがない、という人が多いと思います。地球上に多様な生物がいる、そのことはよくわかるのですが、それが今どうなっていて、どうすべきなのか、ということが「生物多様性」という言葉からはイメージしにくいからかもしれません。

しかし、「生物多様性」とは、

私たち人間を含め多くのいのちがお互いに支えあっていることであり、私たちの暮らしにとって、とても身近なことなのです。毎日食卓にのぼるさまざまな野菜、肉、魚などの食材。それはまさに「生物多様性」の恵みであり、それが損なわれてしまえば、私たちの暮らしにも大きな影響があるのです。

今、地球がおよそ40億年かけて培ってきた「生物多様性」は、急速に失われようとしています。この問題に対応するため、1992年、リオの地球サミットで多くの国が生物多様性条約に署名し、日本でも95年に生物多様性国家戦略という生物多様性の保全と持続可能な利用のための計画をつくってきました。

しかし、かつての勢いはなくなつたものの、依然として開発による生息地の減少は続いており、また、里地里山の荒廃や外来種の影響により、多くの種が絶滅の危機に瀕しています。昨年11月に閣議決定された「第3次生物多様性国家戦略」では、

核となる保護区や湿地を結び、生態系をネットワーク化する。と、生物多様性という言葉を通じて、生物多様性という言葉が浸透させることなどが盛り込まれています。国家戦略は国の施策を定めたものですが、自然環境の保全や再生には、自治体、企業、NPO/NGOなど、さまざまな人たちが協力して行うことが大切です。たとえば千葉県では県版の生物多様性戦略をつくっており、このような取組が全国に広がるのが期待されます。

今

今年7月の洞爺湖サミットに先立ち、5月には神戸で環境大臣の会合

があります。そこではさきほどの3本柱が大きなテーマになると思います。日本の生物多様性保全への取り組みはもろろん、自然と共生してきた日本独自の智慧―里山をSATOYAMAとして海外に発信、さらには日本が名古屋での開催に立候補している2010年のCOP10での議論が深まるはず。今年、そのためのスタートの年にしていきたいと思っています。

- 002 ニッポンは里山の国
- 004 生物多様性ってなに？
書き手●枝廣淳子
- 008 日本のゆたかな生物多様性
- 010 ニッポンのエコツアー
日本は生物多様性の宝庫
環境鼎談
コーディネーター 草野満代
コンサベーション・インターナショナル ジャパン 日比保史
バードライフ・アジア 鈴江恵子
- 016 五感で感じる生物多様性
インタビュー
三國清三
吉田恭子
石坂亜紀
平野文
佐々木真一
- 022 企業活動が生物多様性に
つながっていく
サントリー株式会社
イオン株式会社
積水ハウス株式会社
- 028 生物多様性を理解するための
キーワード
- 巻末コラム
- 030 生物多様性をもっと身近に



チビコト

Contents

ゆたかな生物多様性と
共に暮らす生き方
ニッポンは里山の国



Reiji Kamezawa



環境省自然環境局
生物多様性地球戦略企画室長
亀澤玲治